

Ocean Newsletter

20 September 2024

NO. 579

帆船の航海が育む海洋リーダー ～持続可能な海の未来を創る人材育成プログラム～

小原朋尚 ● OHARA Tomohisa

(公財) 笹川平和財団海洋政策研究所 (OPRI) では、海洋が直面する問題を解決し、将来において持続可能な海洋の利用を実現するために2030年以降に活躍する次世代の海洋リーダーを育成するプログラムを展開している。

このプログラムは2022年から5年間で100名の若者を支援することを目標としており、クルーズ船や帆船による航海実習に加え海洋に関する国際会議などへの参加を通じて、海洋が抱える課題の発見と共有、課題解決に向けた手法の設計と関係者間の合意形成を推進できる海洋リーダーの育成を目指している。

帆船でのGLOBEによる海洋リテラシー教育とリーダー育成 Christina Buffington

GLOBEは世界中の科学者や教育者と協力して、青少年がGLOBEデータを収集、提出、分析する機会を作っている。

私はGLOBEプログラムの研修を受けたインストラクターの一人として

日本一パラオ親善ヨットレース2024の伴走船「みらいへ」に乗船し、GLOBEデータの収集で若者たちを指導した。研修生と気象観測や海洋の環境調査を行いながら、この帆船の旅を通して共に成長できたことを報告したい。

海の健康度を評価する ～海水温度と溶存酸素濃度を「みらいへ」船上で分析～

Miraz Hossain Chowdhury

(公財) 笹川平和財団海洋政策研究所 (OPRI) が行う帆船「みらいへ」での海洋教育プログラムに参加する幸運に恵まれた。

この航海での体験実習では、国際的な科学教育プログラムであるGLOBEのデータベースに寄与する

データやサンプルの収集を行い、私たちが将来研究に取り組む上で有益な経験ができた。

「みらいへ」で培ったグローバルな結束には海洋の持続可能性に寄与する高い潜在力がある、という重要な教訓を実感した。

帆船の航海が育む海洋リーダー

～持続可能な海の未来を創る人材育成プログラム～

[KEYWORDS] 海洋人材育成／セイルトレーニング／冒険教育

小原朋尚 ● (公財) 笹川平和財団海洋政策研究所特任部長

海洋人材 100 人育成計画

海洋はいま、さまざまな危機に瀕しています。海水の温度上昇や酸性化、プラスチックごみの増加、違法・無報告・無規制漁業による水産資源の減少など、人類の存続にとっても喫緊の課題となっています。そこで (公財) 笹川平和財団海洋政策研究所 (OPRI) では、海洋が直面する問題を解決し、将来において持続可能な海洋の利用を実現するために 2030 年以降に活躍する次世代の海洋リーダーを育成するプログラムを展開しています。このプログラムは 2022 年から 5 年間で 100 名の若者を支援することを目標としており、クルーズ船や帆船による航海実習に加え海洋に関する国際会議などへの参加を通じて、海洋が抱える課題の発見と共有、課題解決に向けた手法の設計と関係者間の合意形成を推進できる海洋リーダーを育成し、その人数はすでに 2024 年 9 月の時点で 79 名を数えます。

その中でもクルーズ船や帆船による航海実習は、船という半ば閉鎖的で特殊な空間において非日常的な特別な体験ができることから、海洋リーダーの育成には非常に有効な手段であると考えます。筆者は長年にわたって海での野外教育、とりわけ冒険教育と言

われる教育プログラムに従事し、帆船 (セイルトレーニングシップ) の船長を務めた経験を踏まえ、本稿では帆船での航海体験がもたらす人材育成の効用について記します。

■ 100 人育成計画参加者リスト

開催年	プログラム名 / 船名	人数	国籍
2022	Our Ocean Conference in Palau 2022	16	10
2022	One Ocean Expedition / STV Statsraad Lehmkuhl	6	5
2023	Our Ocean Conference in Panama 2023	12	11
2023	MV Pacific World	7	7
2023	COP28 in Dubai	1	1
2024	Japan-Palau Goodwill Yacht Race / STV Miraie	20	8
2024	Our Ocean Conference in Athens 2024	13	11
2024	The 4th International Conference on Small Island Developing States	4	3
	合計	79	

自然と人に向き合う学び、セイルトレーニング

セイルトレーニングとは、帆船での航海体験を通じてチームワークやリーダーシップ、自主性、決断力、チャレンジ精神、自己効力感などを育むことを目的とした人材育成プログラムで、欧州や北米、オセアニアを中心に世界各国で展開されている教育活動です。帆船での航海では、高いマストに登ったり多くのロープやセイルを操作します。大きなセイルを操作するには数十人が力をあわせて 1 本のロープを引き込む必要があります。さらに目的地にたどり着くためには航海計画を立て、舵の操作や見張り、海図上での現在位置や針路の確認など、役割に応じた作業を行う必要があります。一方、船内での生活は狭いキャビンでの共同生活となり、毎日の掃除や食事の準備、片付けなどもトレーニー (訓練生) 同士で協力して行います。乗船してから数日間は船酔いに苦しめられることでしょう。このように帆船ではトレーニー 同士が積極的にコミュニケーションを図り、協力し合わなければ安全な航海を成就させることができません。それぞれの役割や責任が明確となり、円滑に連携しなければならない状況においてチームワークの大切さを実感することができます。さらに海という大自然のなかで、刻々と変化する状況に応じて迅速で冷静な判断が求められます。

また、自然の厳しさに向き合いながら、マスト上での作業での高さへの恐怖心や船酔いによる身体的な負荷、人間関係や日々のチャレンジングな活動による精神的な負荷などこれらの困難な課

題を克服することで得られる自己効力感は、新しい自分自身の未知の可能性を見出し、自信を深める機会となります。トレーニーにとって帆船での航海はまさに困難や挑戦の連続であり、コンフォートゾーン(自分自身のこれまでの経験から自分にとって居心地のいい場所や範囲)から大きく抜け出した体験ができる場であると言えます。

このように大自然のなかで、ある程度の危険を伴い、できるか否かが不確定で困難な活動を自主的・自発的に行うことで、ある一定の教育効果を得ようとする人材育成の手法を冒険教育(Adventure Education)と呼んでいます。



協力して帆を量む作業を行う各国のトレーニーたち

冒険教育の原点と進化

“A ship is safe in harbor, but that is not ships are built for. (船は港にいれば安全である。しかしそのために造られたのではない) — William Shedd” この一文はセイルトレーニングの礎を築いたと言われている英国発祥の冒険教育機関「アウトワードバウンドスクール(OBS)」の教育現場で頻繁に使われている OBS の指導理念を表している言葉です。OBS を創設したドイツ人教育者の Kurt Hahn は、第二次世界大戦中にドイツの U ボートに撃沈されて海に投げ出された船員のうち、よく訓練された若い船員よりも体力が劣る歳をとった船員の方が多く生き延びた事象を捉え、当時の若者には困難に直面した際にそれらを乗り越え、生き延びようとする意欲が低く、精神力や積極性などが劣っているのではと考え、冒険教育の必要性を唱えました。当初は船員のサバイバルを目的としたトレーニングであったものの、そのプログラムは出港前の船に掲げる旗を意味する“Outward Bound”と名付けられ、単に船が攻撃された時に備えた訓練としての側面だけではなく、困難に対してまっすぐに向き合い乗り越えるまで努力を続け、自らの力で成功体験を得ることが将来の人生に対する姿勢や人に対する思いやりの心を育て、それが社会のためになるという考え方が普及し、いまでは世界 33 カ国・地域で展開されています。またこの OBS の基礎理念や冒険教育の手法をより短期間かつ繰り返し実施でき、普及しやすい人材育成の手法としてプロジェクトアドベンチャー(PA)が北米で開発され、日本国内でも学校や会社等で取り入れられています。

このように冒険教育は船員の訓練としての役割にとどまらず、人材育成という教育的な価値が見いだされ、商業的な目的で使用されていた大型帆船がほとんど姿を消している現代においても帆船を利用して若者の教育に活用するというセイルトレーニングは、冒険教育の一環としても注目されています。

船は小さな地球、多様化するセイルトレーニングと海洋リーダーのネットワーク構築

近年では、セイルトレーニングはさらに多様化しており、環境教育や異文化理解を含む総合的なプログラムが展開されています。単なる航海技術の習得にとどまらず、持続可能な社会の構築に貢献する人材の育成や、グローバルな視点を持つリーダーの育成を目的とするものへと進化しています。セイルトレーニングは、冒険教育の歴史の中でその役割を変化させながらも、常に教育の重要な一翼を担い続けてきました。世界につながる海を航行できる帆船だからこそ、地球規模での課題にもその地点に直接赴くことができ、また価値観の異なる者同士が互いに協力し合える環境を創り出せることから、セイルトレーニングは人類共通の目的である持続可能な社会と世界平和の実現に大いに寄与できる教育プログラムと言えます。まさに、OPRI が実施する海洋人材 100 人育成計画は、次世代を担う人たちが共に学び合い、若い頃から世界的なネットワークの構築を可能とし、将来の国際連携に繋がっていくものと確信しています。(了)

帆船でのGLOBEによる 海洋リテラシー教育とリーダー育成

[KEYWORDS] GLOBEプログラム／気象観測／環境調査

Christina Buffington ● アラスカ大学フェアバンクス校科学教育スペシャリスト

若者たちが見た空の変化

帆船「みらいへ」が三河湾に停泊した2日間で、私は船乗りが昔からずっと知っていたことを学びました。それは「雲を見よ」ということです。天候はすぐに変わることがあります。乗組員とインストラクター、世界12カ国から集まった20人の若い研修生が横浜からパラオに向けて出港した2024年3月10日、空は晴れ渡っていました。横浜の街並みの向こうには富士山が輝いていました。翌日、上空には薄くうっすらとした巻雲があり、太陽の周りにハロ(日暈)が発生していることを若者たちが観測しました。ほどなく、富士山上空に積乱雲が沸き上がり、風向きが変わりました。そびえ立つ雲の列は「スコールライン」の発生を警告するもので、危険な海のサインでした。空の様子がみるみる変化していくのを目の当たりにするのは、GLOBEオブザーバー・アプリを使って雲の種類となぜ船乗りが空を見るのかを教える絶好のタイミングでした。

(公財)笹川平和財団海洋政策研究所(OPRI)は、海洋リテラシー教育とリーダー育成のための若者支援プログラム「2024年国際海洋人材育成プロジェクト」のインストラクターとして、私とCheryl Williamsさんを招いてくださいました。私たちはアラスカを拠点とする、科学教育プログラムのGLOBE(環境のための地球規模の学習および観測)プログラム^{*1}の研修を受けた教育者です。GLOBEとOPRIは、科学リテラシーを高め、海を含めた環境に関心を持つ人々の間のつながりを築くという共通の目標を持っています。米政府機関である航空宇宙局(NASA)や海洋大気庁(NOAA)、国立科学財団、国務省の支援を受け、GLOBEは世界中の科学者や教育者と協力して、青少年がGLOBEデータを収集、提出、分析する機会を作っています。研修生が雲の確認や撮影、データ入力に使ったGLOBEオブザーバー・アプリは、NASAと二国間協定を結んでいる日本を含む各国でダウンロードして使用できます。

日本—パラオ親善ヨットレース2024の伴走船「みらいへ」で、横浜港からパラオのコロール港までの約2,000海里を航海しながら、Williamsさんと私は帆船の航海術を学び、雲や大気圧、相対湿度、大気温と海面水温、溶存酸素、塩分、pH、硝酸塩、リン酸塩、化学的酸素要求量、マイクロプラスチックに関するGLOBEデータの収集で若者たちを指導しました。119地点のデータ全てがGLOBEデータベース^{*2}に入力され、OPRIのGLOBEページから検索できます。

雲と天候と航海

三河湾に停泊して左右に揺れている時、プログラム担当の航海士が私に、船酔いしていない研修生に講義をしてはどうかと提案しました。そこで私は、GLOBEの雲の観測データの解釈の仕方や天気図記号の読み方、なぜ自分たちが嵐が過ぎるのを待っているのかを理解する方法を教えました。私は、GLOBEの授業計画と今回の旅の前に作っておいた講義用スライド、インターナシヨ



空を眺めて雲を観察する研修生たち

ナル・セイル・アンド・パワー・アカデミー (ISPA) の大型帆船用ワークブックを、雲と天候、航海について教えるためのツールとしました。

ISPA ワークブックの巻末にあるリファレンスガイドには、さまざまな天候パターンにおいて何が起きるかが書かれていました。学生たちが観測した雲と天候の変化がまさにその通りの順序でまとめられていました。気温が上昇し、南南西の風が吹き、気圧が低下し、高い所にある薄い巻雲が太陽の周りにハロを伴う巻層雲に変わったら、船乗りには寒冷前線の前触れです。前線が近づくと、高くそびえる積乱雲が壁のように見えるスコールラインを形成します。ISPA のワークブックから、研修生と私は、船乗りは空を読む必要があるということを学びました。

また、船乗りが天気図や波浪予報図を読む必要があることも学びました。船内の通路に掲示された天気図を見ると、雲が何を私たちに示しているかを確認することができました。私たちがいる位置を中心とする低気圧帯は、はるか東と西にある2つの高気圧帯に挟まれていました。天気図上の矢羽は風が吹いてくる方向を示し、矢羽の線の数は風力を示しています。西から風速30ノットの風が吹き、波がこちらに向かってくるため、知多半島と渥美半島に守られた場所で嵐が過ぎるのを待つのが最善だったのです。

寒冷前線が通過するのを待つ2日間、船酔いを抑えながら ISPA のワークブックを勉強したり、天気図や波浪図を読んだりするのはつらいことになりそうでした。しばらくすると、ふわふわの積雲が晴天を知らせ、「みらいへ」は旅路を先に進めました。1週間もしないうちに、ISPA ワークブックが納得いくものになり、研修生たちと私は、見かけの風速と風向きを測るだけでなく、航路を決めて航海することもできるようになりました。

水質データの収集と分析

「みらいへ」には、水質データ収集に必要な機材が装備されていました。研修生たちと Williams さんと私は、溶存酸素計と pH メーター、塩分計、硝酸塩とリン酸塩、化学的酸素要求量の測定キット、プランクトンとマイクロプラスチックを集めてろ過するためのプランクトンネットと漏斗を使用しました。

研修生たちは、機器の説明書と、日本の GLOBE カントリーコーディネーターから提供された水サンプル採取のための日本語の GLOBE フィールドガイドに熱心に従っていました。

ほぼ毎日、「みらいへ」が観測のために2ノットに減速する30分の間に、研修生たちはブリッジでデータを収集し、GLOBE オブザーバー・アプリを使って雲を撮影、ロープの先に付けたバケツを海に投げ入れてサンプルを採取しました。彼らはそのデータをスプレッドシートと GLOBE アプリに入力しました。Ashlee Wells さんが作成した StoryMaps というウェブサイト^{※3}には、プランクトンネットを曳航してデータを集める様子を収めた動画が掲載されています。



プランクトンネットを曳航してマイクロプラスチックを採取

旅の終わりに、若者たちと Williams さんと私は、ISPA から大型帆船のノービス (初心者) クルーとして、また GLOBE プログラムから大気・水質に関する学生科学者として認定されたことを祝いました。帆船「みらいへ」による約2,000海里の旅の間に、世界中から集まった20人の若者は他人から友人に、研修生からリーダーに成長しました。(了)

※1 GLOBE 国際 STEM ネットワーク (GISN) <https://www.globe.gov/web/globe-international-stem-network>

※2 GLOBE データベース <https://www.globe.gov/web/miraie-ocean-human-resource-development-project>

※3 StoryMaps <https://arcg.is/0S5uGT>

● 本稿は、英語の原文を翻案したものです。原文は、当財団英文サイトでご覧いただけます。 <https://www.spf.org/en/opri/newsletter/>

海健康度を評価する

～海水温度と溶存酸素濃度を「みらいへ」船上で分析～

[KEYWORDS] 体験実習／海洋観測／海洋教育

Miraz Hossain Chowdhury ● チッタゴン大学法学専攻1年

帆船「みらいへ」での体験実習

(公財)笹川平和財団海洋政策研究所(OPRI)は世界12カ国から20人のユースを招へいし、帆船「みらいへ」^{*1}での海洋教育プログラムを実施しました。このプログラムは2030年までに持続可能な海洋の利用を効果的に推進できる次世代の海洋リーダー育成を目指すものです。2024年3月10日、「みらいへ」は日本—パラオ親善ヨットレース2024の伴走船として横浜港からパラオのコロール港に向けて出航し、私は南アジア諸国から唯一乗船する幸運に恵まれました。

私たちが参加した海洋科学の体験実習では、航海の中で国際的な科学教育プログラムであるGLOBEのデータベース^{*2}に寄与するデータやサンプルの収集を行いました。観測は雲量、風速と風向き、大気圧、相対湿度、温度といった大気パラメーターのほか、水温、pH、塩分、溶存酸素、硝酸塩、リン酸塩といった海洋パラメーターについても行いました。さらに海水サンプルを収集し、水中に存在するマイクロプラスチックとプランクトンの量を調べました。サンプルの含有物は顕微鏡を用いて割り出しました。

航海を間もなく終えようという時点になって、自分たちが収集した海水温度と溶存酸素レベルについて、私たちのインストラクターであるChristina Buffingtonさん(アラスカ大学フェアバンクス校における科学と教育のスペシャリスト)が、検討するようにと勧めてくださいました。そこで、私は私の素晴らしい共同研究者である松野允時さん(米国在住 中学生)とさらに観測を行い、私たちが収集し



松野允時さんと筆者(右)が調査レポートに取り組んでいる様子(撮影: Christina Buffington)

た「海面水温と溶存酸素に関する我々のデータの正確性」を調べました。収集した海水を素早く測定しないと数値が変わる可能性があったため、慎重に扱う必要がありました。Christina Buffingtonさんの指導のもと、私は松野允時さんと結果をポスターにまとめ、パラオ到着後に

阪口秀博士(海洋政策研究所所長)やその他著名なゲストを含め、皆さんの前で最終的に調査レポートを発表することができました。この調査レポートは後日GLOBEプログラム(環境のための地球規模の学習および観測プログラム)で選定され、そのウェブサイト上で発表されました^{*3}。

海洋データ観測と海洋リテラシーの重要性

海は海洋生態環境を維持し、世界の気候システムをコントロールする上で不可欠です。海の生物多様性の変化と、それが海洋生物にどう影響するのかを理解するためには、海水温度や溶存酸素レベルといった重要な変数に注目し続けることが極めて重要です。そうした重要な指標をモニターすることが欠かせません。こうした測定基準を評価する上で私たちが目指すのは、海の生態系に対する私たちの知識を高めることです。海洋調査も行う帆船「みらいへ」は日本からパラオへと向かう途中、三河湾からフィリピン海へと航海する中で海水面の温度と溶存酸素レベルを記録していきました。私たちは7日間のデータ収集で海面水温と溶存酸素レベルを測定しています。この

データが人と海にどのようなインパクトを与えることができるか、というのが私たちにとって新たなコンセプトとなりました。

私たちの人生で初めてこの広大な海洋からデータを集め始めたときは現実離れしていると感じ、最初に思い浮かんだのは、私たちが取った海面水温や溶存酸素のデータが正確なのかということでした。大半のデータが正確だとは思いますが、海水をバケツ採水の状態ですぐに長時間放置すると、海水から溶存酸素が脱気する可能性があるため、値が不正確になる場合があります。

私たちが採取した海面水温を図1に示す海水温度マップと比較するとすぐに、私たちのデータが妥当であることがわかりました。その上、溶存酸素についての私たちの測定結果は予想した結果と正確に一致しました(図2)。さらに海水温度と溶存酸素濃度との間には負の相関が見られ、これは海水温が上昇すると溶存酸素量が減少することを意味します。この減少は温度上昇の結果、海水中の分子の動きが加速することによって生じるもので、水中からの溶存酸素の拡散に繋がります。

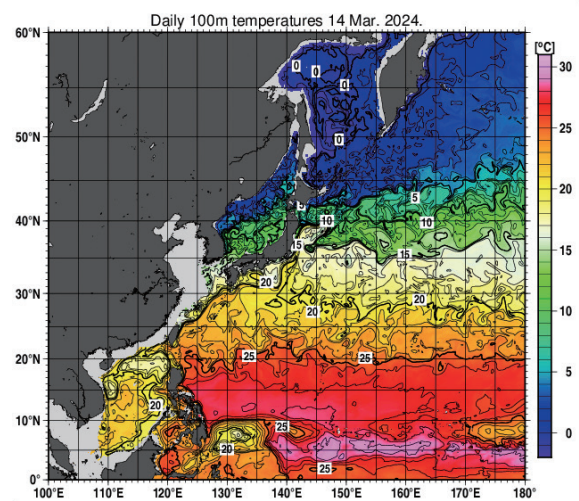
「みらいへ」で水温の上昇について学ぶ中で、私たちは古代から現在に至るまでの海水温の変化を調べ始めました。目指すのは人間活動がいかにこうした変化に影響を及ぼしたかを特定することでした。私たちはこの経験で、さまざまな海洋関係の分野で批判眼を持って考え、知識を広げる能力を向上させるつもりです。

体験実習を通して得た教訓

この調査レポート作成の道筋は、確実に研究が大好きな私の考える力やこの問題に関する視野を広げてくれました。さらにインストラクターの方の尽力と洞察に満ちた助言のおかげで、私たちの作業はよりやりやすいものとなりました。これは私たちが将来研究に取り組む上で有益なものになると確信しています。個人的には「みらいへ」での航海が私を全く違う人間へと変えてくれました。航海の前、異なる地域の人々と関わる際の私は不安や内気さ、自信のなさで苦勞していました。しかしながら未来へ向かうこの旅により、私は今や躊躇なく他の人たちと関わりコミュニケーションをとれる自信に満ちた人間へと変わり、またこれからの私の人生にとって大切な新しいファミリーを得ることができました。航海を終えて私は、「みらいへ」で培ったグローバルな結束には海洋の持続可能性に寄与する高い潜在力がある、という重要な教訓を実感した次第です。最後になりますが、Christina Buffingtonさん、2024年研修生、そして「みらいへ」の全乗組員の方々へ、この実験をご支援いただいたことに感謝の意を示したいと思います。(了)

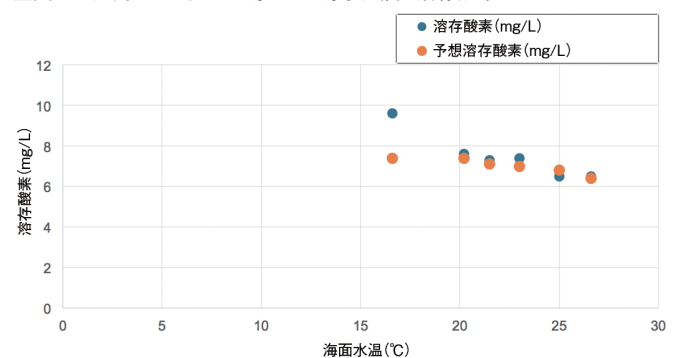
■図1 平均海水温度マップ

深さ 100メートルでの日別水温、2024年3月14日



私たちのデータを、日本の三河湾からフィリピン海までの深さ 100メートル地点の日平均海水温を示すこのマップと比較。(出典: 気象庁、2024年)

■図2 三河湾からフィリピン海までの海水温度と溶存酸素



※1 [開催報告]2023年度国際海洋人材育成プロジェクト(海洋人材100人育成計画) <https://www.spf.org/opri/news/20240410.html>

※2 GLOBEプログラム <https://www2.u-gakugei.ac.jp/~globe/>

※3 調査レポート <https://www.globe.gov/do-globe/research-resources/student-research-reports/-/projectdetail/globe/assessing-the-accuracy-of-our-seawater-temperature-at-the-surface-and-dissolved-oxygen-data>

●本稿は、英語の原文を翻訳したものです。原文は、当財団英文サイトでご覧いただけます。 <https://www.spf.org/en/opri/newsletter/>


<https://www.spf.org/opri/>

◆(公財)笹川平和財団海洋政策研究所が2022年度から進めている「海洋人材100人育成計画」の一環として、2024年3月10日から3月25日までの16日間、わが国にたった3隻しか現存しない大型帆船の1隻である「みらいへ」に、世界中から集まった12歳から24歳までの次世代を担う若者20名と、アラスカから2名のインストラクターを乗せて、横浜港からパラオのコロール港までの航海を行った。パラオ共和国は、(公財)笹川平和財団と親財団である日本財団が長年に亘り支援と友好関係を築いてきた国である。また、2024年は、日本・パラオ外交関係樹立30周年の年で、それを記念した日本・パラオ親善ヨットレース2024の伴走船として(一社)日本パラオ青少年セーリングクラブ(JPYSC)藤木幸太代表理事及び新田肇代表理事、その他方々のご尽力で仕立てて頂いたのが、みらいへ航海であった。◆本号では、まず、1つ目の記事で、当時の帆船みらいへ船長で、現在は海洋政策研究所の小原朋尚部長に、帆船教育の持つ意味合いについて詳しく述べてもらった。わが国にたった3隻しかない大型帆船の船長という職を長く経験した人の言葉だけあって、非常に含蓄が深い話である。◆また、この航海では、アラスカを拠点とする、科学教育プログラムGLOBE(詳細は本文にて)プログラムの研修を受けた教育者であるChristina BuffingtonさんとCheryl Williamsさんの2名にインストラクターを務めて頂いた。本号2つ目の記事で、Buffingtonさんに、出港直後に低気圧の影響で三河湾に荒天退避したときの2日間の出来事を中心に教育者として経験されたことをまとめて頂いた。◆本プログラムでは、船上で経験し学んだことや自らが目にした海洋の現状や問題点を、この航海に参加できなかった多くの人々に伝え一緒に考えてもらうことも、一つのテーマとしていた。この点でも、2人のインストラクターは、単にやり方を教えるのではなく、自主性を重んじた指導をして下さった。その結果、本号の3つ目の記事でバングラデシュから参加した大学1年生のMiraz Hossain Chowdhury君が紹介している調査報告書は、アメリカで公表され高い評価を受けた。また、トルコから参加した高校生は高度なカメラワークによる活動報告ムービーを自主製作した。本号のオンライン版では、アメリカから参加したAshlee Wellsさんの作品を紹介するので、是非、ご視聴頂きたい。既に内外から、「これぞ、教育!」という感想を頂いている秀逸な作品である。◆さて、コロールに入港した夜のミーティングで、参加者の一人から、「なぜ日本からパラオの航海をこのプログラムに選んだのか?」という質問が出た。勿論、冒頭に述べたように、パラオは日本政府にも日本財団と(公財)笹川平和財団にも特別な関係であるのだが、海洋人材を育成する観点から筆者はこう答えた。「太平洋は世界で一番広い海洋で、パラオの海の様子が地球の健全性を代表していることが既に科学的に分かっています。このパラオの海を守れなくなったとき、地球のバランスが崩れます。あなた方は、2024年のパラオの海の生き証人であり、未来にわたって、この海を守り、また次の世代にもそれを引き継いで下さい」と。(所長 阪口秀)

みなさまのご意見をお待ちしております。

『Ocean Newsletter』は、読者のみなさまからのご意見を歓迎いたします。鋭い現状分析、創造的なご意見、積極的な問題提起や政策提言などを求めます。頂戴したご意見・原稿は、編集会議で拝読のうえ、編集に反映させていただきます。

ご提出は、電子メールまたはFAXでお願い致します。

E-mail : oceannewsletter@spf.or.jp

FAX:03-5157-5230

詳細は、本財団ウェブサイトをご参照下さい。

『Ocean Newsletter』 次号No.580は、10月5日発行です。

下記URLにご登録いただきますと、
発行日にメール配信いたします。

https://www.spf.org/opri/newsletter/mail_magazine/

●OPRI情報発信アドバイザーボード(50音順)

秋道智彌(海洋人類学)

山梨県立富士山世界遺産センター所長

飯田将司(中国外交・安全保障)

防衛研究所理論研究部長

北村喜宣(環境法)

上智大学法学部教授

佐藤慎司(海岸工学・沿岸環境)

高知工科大学大学院工学研究科教授

庄司るり(航海学)

(国研)海上・港湾・航空技術研究所理事長

鈴木英之(船舶海洋工学)

東京大学大学院工学系研究科教授

高井研(地球微生物学)

(国研)海洋研究開発機構超先鋭研究開発部門部門長

瀧澤美奈子

日本科学技術ジャーナリスト会議副会長

竹田有里

環境ジャーナリスト、報道記者

西本健太郎(国際法)

東北大学大学院法学研究科教授

宮原正典

よろず水産相談室afc.masaf代表

山形俊男(海洋物理学・気候力学)

(国研)海洋研究開発機構アプリケーションラボ特任上席研究員

山下東子(水産経済学)

大東文化大学経済学部特任教授

早稲田卓爾(海洋技術環境学)

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

●発行人／編集代表

阪口秀 公益財団法人笹川平和財団 海洋政策研究所所長

●発行

公益財団法人笹川平和財団 海洋政策研究所

〒105-8524

東京都港区虎ノ門1-15-16笹川平和財団ビル6階

TEL. 03-5157-5210 / FAX. 03-5157-5230

OPRI 海洋政策研究所

●●●●●●●● SASAKAWA PEACE FOUNDATION

Ocean Newsletter No.579

2024年9月20日発行(毎月5日・20日発行)

©2024 Ocean Policy Research Institute, The Sasakawa Peace Foundation

製作:(有)ブレインワークス